

文化映画 紹介

渡部実

「たのしさいっぱい! 郷土の音楽」東京シネ・ビデオ作品

「ノルウェーの音楽療法に学ぶ」映学社作品

たのしさいっぱい!
郷土の音楽 — 民族音
楽の豊かな世界 —

「スタッフ」製作／横川元彦
プロデューサー／田邊義和
演出／福原進 撮影／上村四四六、岩淵弘 照明／澤田実 VE／岩佐治彦、竹田喜夫、佐々木信哉
製作主任／吉村繁 編集スタジオ／ビジュアル・ブル
編集／京極宣曉 録音スタジオ／福島音響 ナレーター／小野寺啓子 監修・指導／国立歴史民俗博物館名誉教授・小島美子、成城大学講師・星野紘、新潟大学教育人間科学部教授・伊藤義博、福島大学教育学部付属小学校教諭・吉川武彦
撮影協力／国立歴史民俗博物館、福島大学教育学部付属小学校、北沢又太鼓保存会、柏崎市綾子舞保存振興会、「白鬚神社の田楽」保存会・徳山博之 製作協力／財団法人視聴覚教育協会
企画・製作／東京シネ・ビ

デオ 完成／04年 ビデオ
作品・20分

「内容」今回は日ごろ市民の身近にある歌(唄)＝音楽を使って、その効果のもたらすさまざまな成果を記録した2作品を紹介しよう。

はじめの作品は、誰にでも親しみのもてる歌を教育に活用した模様を描いた作品である。日本各地にはそれぞれ土地に古くから伝わる芸能がある。その芸能の根幹を成すものに郷土の歌などがある。この作品は学校(小中学校)の音楽教育の一環として地元の人々に歌い継がれてきた歌から、郷土音楽の良さを教える——郷土音楽を再認識させるという目的をもって製作された。

まずは小学校の吉川先生の授業が紹介される(福島大学教育学部付属小学校)。それは箏を使って、音の記憶というか、現代にも通じる音の感覚を生徒たちに目覚めさせる授業である。生徒たちは箏の弦を使って、

自分たちも知っている(わらべうた)の旋律を探し始める。すると先生は箏の弦をつま弾いて、「ひいらいた ひいらいた」「かごめかごめ」といった(わらべうた)を導き出す。普段、あまり接したことのない箏という楽器が、生徒たちに急に身近になってくる。これより吉川先生は、生徒たちに向かって、家族の人々にもどのような歌や遊びが伝わっているかを聞き、より広く自分たちが住む郷土に伝わる歌、踊りにも関心を向けさせていく。例えば先生は自分で撮影した近所の盆踊りの様子を生徒たちに見せて、地域の保存会の人たちの協力のもと、盆踊りの実演なども実現させる。実演の前に生徒たちは箏や太鼓なども使いはじめ、お囃子などもやってみよう。太鼓の練習には古いタイヤを叩き、箏の練習もリコーダーを使って行なう。生徒たちの自発的な情熱で音楽の利用範囲はどんどんと広

がつていく。そして、最後は音楽の練習の成果を地元の人たちに見てもらおう発表会となる。

現在の日本は地域によっては過疎化が進み、ともすると地元の郷土芸能などは忘れ去られ、消えゆく運命にあるのかもしれない。そのような文化を若い世代に



「たのしさいっぱい」郷土の音楽



「ノルウェーの音楽療法に学ぶ」

伝えることはかなり難しいと思われるが、この映画での吉川先生は、まず「へわらべうた」のような存在をあらためて見直すことから始める。そこにきつかけが生まれる。はじめは生徒たちが接することが少なかった音楽や舞踊であるが、そのような郷土芸能の再発見の様子をとらえたものとして興味深い一作である。(問合せ先「東京シネ・ビデオTEL031324213151」)

ノルウェーの音楽療法に学ぶ — 音楽療法の可能性を求めて —

「スタッフ」企画／福田義子 製作統括・演出／高木裕己 撮影／足立真仁 録音／レモリノ・ロバート コーディネーター／福田雅子、アンデルセン 翻訳／奈良英子 音楽／柏瀬紀代 隆演出助手／阿部伸太郎 製作デスク／正者章子 ナレーター／遠藤たつお 編

集スタジオ／ビデオウォーク録音スタジオ／福島音響製作・著作／ぜん息音楽療法研究連合、映映学社 完成・04年 ビデオ作品・26分

「内容」次に紹介する作品は、音楽の持つ現実的な力は、治療力を記録している。

北欧の一國、ノルウェーでは、医療や福祉の分野に音楽療法が取り入れられている。しかも音楽療法でノルウェーは世界先進国といわれる。福祉国家といわれるこの国では、早くから音楽療法への関心が高まり、1972年に音楽療法協会が設立。大学では音楽療法コースも設立された。音楽療法とは文字通り、患者たちに音楽を聞かせ、患者本人にも演奏をさせるものである。具体的には重度の障害者、あるいはダウン症などの人たちに対して行なわれている。

映画は1980年代より音楽療法のモデル地区となつた人口約5千人の小さな

町、グロッペン市に取材をして音楽療法の実態を記録する。同市では1982年から5年間かけて3名の音楽療法士が福祉と医療のプロジェクトを組み、障害者と健常者が共生する町作りを実現してきたという。療法の実際は、患者たちに無理のないように緩やかに音楽に親しませるものだ。別段、強い個性を持った療法ではない。むしろ「たのしさいっぱい！郷土の音楽」にも共通することだが、音楽に対して当事者たちが自由な発想と即興でもって接するということではないだろう。決められた名曲を楽譜通りに演奏することには義務感が伴うし、興味を持つことはあまり期待できないであろう。それに対して音楽療法での演奏は患者の自主性を尊重しているように見える。色々な楽器を使うことも見えていて納得がいく。

ノルウェーでは、海外の音楽療法士との交流も盛ん

である。映画は後半に音楽の力により複式呼吸を身につけさせるぜん息音楽療法と、それを実践している日本人の音楽療法士・福田義子先生との交流も紹介している。

この映画を見て感じることは、音楽療法は有意義なものであるが、その療法を地域に根づかせるには、ノルウェー国家のように福祉に万全の配慮をしなければならぬということであろう。この国は既に立派な福祉の実績を持っている。その経験の自信がさらに音楽療法を進化させていると思われる。日本人は医療の面で優れた発想と技術を持っていると思われるが、残念なことには北欧諸国に比べてそれらを支える日本の福祉制度はかなり遅れているのだ。音楽療法という日本人にはまだ聞きなれない療法が日本でも定着すると良い。(問合せ先「映学社TEL031335919729」)